

はじめに

近年、地球温暖化問題を始め一国では解決できない課題が数多く発生し、世界の各国が協力して解決を図っていく必要性が高まっている。このため、各国の相互理解の促進に資する国際交流の重要性は一層増しているといえる。

今回、私が参加した日本青年海外派遣事業は、平成6年に皇太子殿下の御成婚を記念して開始された国際青年育成交流事業を2019年の御代替わりを契機に発展させたものであり、本年は「自国のアイデンティティと多文化共生」というテーマを設定し、日本の青年をオーストリア共和国及びリトアニア共和国に派遣し、ケーススタディを行うことで現代の複雑化したグローバル社会に対応できる国際的視野を持つ青年を育成することを目的とした。

今回のオーストリア・リトアニア派遣団のメンバーの構成は、団員11名（うち男性4名、女性7名で年齢は、18歳から30歳）と世界青年の船経験者の鈴木副団長と団長の私を加えた総勢13名であった。

7月2日から6日までの事前研修では、一連のプログラムを受講していくうちに、最初は緊張して遠慮がちであったメンバーが徐々に打ち解けて団として一体感が形成されていった。訪問団の目標については、団員が何度か話し合いを重ねた上で「Beautiful Harmony 人を繋ぎ未来を創造する」に決定した。この目標の意図するところは、異なる文化を理解し、国境を越えた繋がりを築いていくことで、世界中の人々が共に良く生きられる未来を自ら創りあげていくという思いが込められたものである。

9月16日からの出発前の成田研修において、両国でのスケジュールの確認や現地での日本文化紹介で披露するよさこい踊りや歌などの仕上げの練習を団員全員で行った上で、9月18日に派遣国へ向けて出発した。

1. リトアニア共和国

今回の最初の訪問国はリトアニア共和国（以下リトアニアという）である。団員全員がリトアニアは初めての訪問ということで、訪問を心待ちにしていた。

成田国際空港からヘルシンキ経由で到着したリトアニアは霧雨が降る夕方であり、予想に反して東

平山 眞

京の初冬並みの寒さに驚いたが、首都ビリニュスの緑の多い、落ち着いた美しい街並みを目の当たりにして、これから始まる未知の国リトアニアの日々でどんな新しい出会いがあるのか、むしろ期待が高まった。リトアニアは、日本では余り知名度は高いとは言えないことから最初に簡単に紹介することとする。

リトアニアは、バルト海に面した、いわゆるバルト三国の一つで、北はラトヴィア、南はポーランド、東はベラルーシ、南西はロシアの飛び地カーリーニングラード州に国境を接し、面積6.5万km²（北海道の約8割）、人口約280万人の共和制の国である。リトアニアの歴史を見ると、15世紀にはリトアニア大公国としてヨーロッパ最大の領土を持つに至ったが、18世紀末にはロシア帝国の支配下に置かれ、1918年、ロシア帝国の崩壊とともに独立を回復したものの、第二次世界大戦中にナチスドイツや旧ソ連からの侵攻を受けた。1944年からは長期にわたるソ連の領土に編入され、1990年によく独立を再回復するという苦難の歴史を経ている。その後、2004年にはNATO及びEU加盟を果たし、欧州の一員としての道を着実に歩んでいる。

リトアニアでは、首都ヴィリニュス、クライバダ及びカウナスの3都市を回り、各施設を訪問し、様々な分野で活躍している多くの人々と交流を重ねた。以下、主要な訪問先を紹介する。

(1) リトアニア共和国議会 (SEIMAS)

9月19日、ビクトラス・ブランキエティス国会議長の表敬訪問を行った。お忙しいにもかかわらず、短い時間であったが団員と親しく懇談いただき大変有難いことだった。議長訪問後、国会の職員の方から国会の各所をご案内いただいたが、特に1990年3月11日の独立再回復の歴史的瞬間をどれほど大切に、誇りに思っているかを痛感した。それは、ソ連からの独立に対して国民の強い意思を示した痕跡である国会玄関のビビの入ったガラスを大切に保管していたり、独立時の数々の写真や独立を記念

する記録が至る所で見られたりしたことでわかった。

また、国会開会中の議場において、審議を中断して、我々派遣団の紹介のアナウンスの後、温かい拍手をもって歓迎をいただいたことは忘れがたいものであった。このような温かい歓迎は、日本リトアニアの友好に多大な影響を与えた杉原千畝氏やこれまでの在リトアニア日本国大使館を始め外交上の努力の賜でもあるが、むしろ我々派遣団の日本青年に対する両国の友好推進への期待の大きさを表すものと思われ、日本の代表団として身の引きしまる思いであった。この国会訪問では、リトアニア人の独立への深く熱い思いを知り、国を愛するとはどういうものなのか、また、自分の国に誇りをもつことの大切さを教えてくれた。

(2) 日本国大使館

9月19日、在リトアニア日本国大使館を訪問した。山崎史郎特命全権大使に歓迎の御挨拶を頂いた後、大使からリトアニアの歴史、政治情勢、今後の展望について懇切丁寧な詳細にわたる御説明をいただいた。その中で特に、リトアニアを知るにはリトアニアの歴史とその地理的事情を理解することが重要であること、すなわち、リトアニアはドイツとソ連の中間に位置し、交戦の時には通過を余儀なくされる国であり、ソ連やドイツに長きに渡って統治されたために、独立に対する思いは極めて強く、海に囲まれている日本とは違う地理的事情を有することの理解が不可欠であるとのことのお話は印象的であった。また、リトアニアがEUに加盟したことには、関税がなくなり、人、商品及びサービスの移動が自由になること、ロシアに対する安全保障となるというよい面があるが、他方、リトアニア人は教育水準が高く英語力にすぐれ、若者が高賃金や高度な教育を求めてEU諸国へ流出するという課題も抱えているとのことだった。リトアニアに対する大使の深い見識と示唆に富んだ話を拝聴し、これからのリトアニアにおける交流を行う上で大変有意義な訪問となった。

(3) ユーロデスク

9月20日にユーロデスクを訪問し、ユーロデスクの理念と活動内容について話を伺った。ユーロデスクは、13歳から30歳までの若者を対象にEU内での若者の流動性を高める活動をしている国際的非営利団体であり、留学の推進やキャリアセン

ターの役割を有するものとして1990年に設立され、EU域内で36の活動拠点をもち、1,000のオフィスを抱えている。ユーロデスクは、若者が他国の人々と交流することにより親交を図り、互いをよく知るきっかけとなり平和への願いが込められている面もあると聞いた。

このような若者を支援する機関が日本より充実しており、日本も含めたアジア版が今後考えられないかと思った。そうすれば、域内の若者の交流により相互理解が進み、アジアにおける平和構築の基盤作りにも資するのではないかと思った。

(4) KGB博物館

9月20日にKGB博物館を訪問した。KGB博物館は、かつてKGB及びゲシュタポの拠点施設として利用されていた建物を博物館として保存、公開している、多文化共生とは対極にある象徴的な建物で、団員が特に訪問を希望した施設の一つである。英語名は、The Museum of Genocide Victims (ジェノサイド犠牲者の博物館)である。このジェノサイドという言葉を使っていることにリトアニア人の恐怖、苦しみが表れており、悲惨な歴史を詳細に保存し、未来永劫同じ過ちを繰り返すことのないようにとの祈りに近い思いが込められていると感じた。

地下1階の盗聴室、牢獄、拷問室及び処刑室(台所と呼ばれ1,000人以上が処刑された)を案内していただき、当時の収容者の置かれた状況や劣悪な環境について詳細に説明を受けた。これらがすべて、今からわずか数十年前に実際に起きていたことであり、人間がいかに残酷になるか、自分と同じ人間が実際行ったという事実、人間は人を愛しながら人を殺せる生き物であるということに愕然たる思いがした。我々は、こういうことを過去のこととして見過ごすのではなく、現在でも同様のことが世界のどこかで起きているかもしれないと常に関心を持つことが必要であると思う。

(5) ミッション・シベリア

9月20日に、ミッション・シベリアを訪問し、実際の活動に参加したメンバーから、ミッション・シベリアの理念及びその活動内容について話を伺った。

ソ連当局は、1941年6月14日から、政治犯、知識人などのリトアニア人のシベリアへ強制追放を開始し、その後11年間に約13万人をシベリアに送った。強制収容所では、労働に従事させられ、

劣悪な衛生環境の中で飢えや寒さもしのぐことができず、多くの人々が彼の地で亡くなった。

ミッション・シベリアは、2004年に設立され、リトアニアの若者たちがイニシアティヴをとる団体であり、ソ連により強制追放され現地で死亡埋葬されたリトアニア人の墓所を探し当て、整備し、併せて彼の地に残った人々及びその子孫と交流し、その話を記録、文書化し、できるだけ多くの歴史的事実をリトアニア本国に持ち帰るのが目的である。この団体は若者に人気があり、毎年約1,000人が応募して16～18人が選抜され実施されているものである。このように、シベリア強制追放が決して忘れられることがないように、若い世代がしっかりと語り継ぐ運動を行っていることに驚いた。彼らが語った「悲しい過去に向き合い、そこから新しい未来を開いていく。」という熱い思いがこもった力強い言葉に深い感銘を受けた。こういう若者たちの活動や思いが、リトアニアの未来を作っていく原動力になるのだと思った。

(6) リトアニア赤十字移住者情報センター

9月23日にリトアニア赤十字移住者情報センターを訪問した。本センターは、赤十字社によって運営されている移住者のための情報センターである。リトアニアの社会システムや移民法に関する相談に加えて、リトアニア語の教室も無償で受講が可能である。リトアニアでは、現在、高い賃金を求めて若者を中心に国外に流出し、人口減少が問題になっているが、その一方で、主に旧ソ連領から移民が流入している。これは、彼らの祖先がリトアニア人であることが多く、故国を求めてリトアニアに流れてくるようである。しかしながら、受け入れ体制が万全とは言えず、本センターが移民受け入れの中核を担って彼らがスムーズにリトアニア国民として暮らせるように活動しているわけである。その結果、リトアニアの人口に占める移民の人口の割合が2015年に1%であったが、2019年には3%に増加しているそうである。

このセンターには、子供が遊ぶ場所もあり、不安を抱えてやってくる移民の人々にとってとても暖かい雰囲気であったことが特に印象に残った。

(7) 杉原記念館

9月24日にカウナスにある杉原記念館を訪問

した。杉原千畝氏は、ポーランド等からナチスの迫害を逃れてきたユダヤ人に、本国の指示に背いてまで約1,600通の日本通過ビザを発行して6,000人を超える命を救った日本人外交官で、「正義の人」としてリトアニアでも高く評価されている。その旧領事館は、杉原記念館として保存され、館内には日本文化研究センターも開設されている。記念館では、館長から杉原千畝氏の生い立ちからその生涯や難民となったユダヤ人の移動の状況、日本との関わりなどについてスライドや展示物を見ながら詳しく教えていただいた。再現された執務室では、戦時下において日本国外交官として本国の命令に従うべきか、今、目の前にある人の命を救うべきかという厳しい選択を迫られた杉原千畝氏の苦悩が手に取るように実感できた。また、戦時下の厳しい状況にありながら、人の命を救う勇気をもっていた同胞人がいたことに誇りを感じた。

今後、二十一世紀という未知の不確実な時代に突入していく中で、新たな様々な課題に対応していく際に、彼の行動は我々により高い視座と強固な決断とは何かを深く考えさせてくれた。

2. オーストリア共和国

昨年引き続き、今年もオーストリア共和国(以下オーストリアという)を訪問したが、今年には日本・オーストリア友好150周年記念という節目の年にあたる。このような記念の年にオーストリアの多くの人々と交流を深めることができたことは大変有意義なことであった。また、オーストリアは、チェコやハンガリーなどの周辺からの移民も多い多民族国家であり、歴史的に見てもハプスブルグ家が統治する帝国として、音楽をはじめ豊かな文化を育んできた国でもある。オーストリアは、現在、中立国として、EUに加盟してもNATOに参加せず、首都ウィーンは第三の国連都市としての国際的役割を担い、また、中・東欧諸国と歴史的地理的つながりを持つという独自の道を歩んでいる国である。今回のテーマである多文化共生についても学ぶことができる様々な施設等を訪問することができた。以下、主要な訪問先を紹介する。

(1) 女性・家庭・青年担当大臣

9月27日、イネス スティリング女性・家庭・青年担当大臣を訪問した。大臣から最初に歓迎のスピーチを

頂いた後に、私から表敬の御挨拶を行った。大臣から、省の取り組みの概要とオーストリア国内の諸課題についてご説明を頂き、質疑応答を行った。団員からジェンダーギャップに関する質問が多く出され、大臣からはオーストリアにおいても男女の賃金に格差が生じているが、男女で機会の不平等が発生していることも問題であるとの説明があった。日本においても、女性のライフステージに適した働き方ができる職場環境を全てのセクターで実現することが必要であると思った。

(2) 日本国大使館及びホームステイ

9月27日、在オーストリア日本国大使館を公式訪問し、小井沼紀芳特命全権大使から歓迎と激励を受けた。大使からは、2019年は、日本とオーストリアの国交樹立150周年であること、両国は自由権、民主主義及び市場経済原理という三つの価値を共有しており、EUとの関係を考える際には、オーストリアとの関係は大変重要であるとの御説明をいただいた。その後、オーストリアにおける働き方、ワークライフバランスの現状、大使館の役割などについて質疑応答を行った。続いて、大使館員からオーストリアについての基本情報をご説明いただき、これから始まるオーストリアでの活動にとって有意義な時間を過ごすことができた。

日本国大使館訪問の後、その日の午後から、全ての団員が最も楽しみにしていたプログラムであるホームステイに向かった。ホームステイでは、ホストファミリーの優しい気遣いや温かさに触れ、オーストリアの一般家庭の日常生活を体験し、家庭料理を味わうなど、思い出に残る、かけがえのない二泊三日を過ごしたようである。

(3) マウトハウゼン強制収容所

10月1日に、ウィーンからバスで約2時間ほどの小高い丘の上にあるマウトハウゼン強制収容所を訪問した。

マウトハウゼン強制収容所は、オーストリアがドイツ帝国に併合されて5ヶ月後の1938年8月にナチスによって建設されたもので、いわゆる第三カテゴリーという再教育の見込みのない犯罪者、反社会分子、政治犯を囚人として収容する強制収容所であった。そのため、ここの囚人は特に過酷な扱いを受け、非人間的な強制労働、暴力、処刑は悲惨を極め、死の収容所と恐れられた。

最初に、本施設の職員の方から、マウトハウゼン強制収容所の背景として、第一次世界大戦から第二次世界大戦に至るヨーロッパの政治情勢等について詳しい講義を受けたが、これまで学校の歴史で学んだものとは、異なる視点からより深く分析された、わかりやすい内容で、大変有意義であった。

その後、施設職員から、各国の追悼碑、シャワー室、収容された人々が厳しい生活を強いられていたバラック棟、身体検査場、処刑場、ガス室などを順次案内していただいた。この収容所がナチスドイツからオーストリアが併合された時代における負の遺産であるためか、この収容所を見学に来るオーストリア人は少なく、ほとんどが国外からの観光客であるとのことであった。しかしながら、案内・説明していただいたオーストリアの職員の熱いこもった説明を聞いていると、この悲劇が絶対に繰り返されることのないように当時何が行われたかを後世に伝えていこうとするオーストリア人としての使命感や責任感を強く感じた。

若い団員たちにとって、こういう施設を訪れ歴史を直接見て肌で感じることは、精神的衝撃は大きいだろう。しかし、こういう悲劇を二度と繰り返さないため、特に次代を担う若い人々に是非訪問してほしいと思うとともに、歴史的施設として保存し、その当時の収容された人々の実情を含めて次代に語り継いでいくことがいかに大切であるか改めて痛感した。そして、二十一世紀を生きる若者が世界を舞台に活躍する上では、二十世紀以降の現代史を知っておくことは絶対必要なことであると思った。

(4) ウィール通り全日制小学校

10月2日、ウィール通り全日制小学校を訪問した。オーストリアでは、午前中で終了する小学校が多い中、本小学校は、全日制の小学校として運営されている。

本小学校が位置するのは、ウィーン市内でも移民や難民が多く生活するエリアであり、多様な文化的宗教的な背景をもった子供たちが通っている。宗教もキリスト教、イスラム教、正教会の信者などがおり、言語面でも、ドイツ語、英語、トルコ語、ボスニア語など様々である。

まず、校長先生から、学校の目標や特色について説明があった。この学校に通う子供たちが多様な

バックグラウンドを持っていることから、言語教育や宗教教育が非常に大切であり、総合的に宗教を学ぶクラスが用意され、また、言語もドイツ語、英語に加えトルコ語、スロヴァキア語のクラスがあるとのことであった。さらに、Philosophy for Childrenという授業では、小学生ながらも、答えのない問題について先生やクラスメートとディスカッションする時間が用意されたり、正規の授業の他に、外遊びや読書など子供たちが自由に選んで学べる時間が設けられたり、様々な工夫がされており、学校が子供の人生を豊かにする存在であり、子供たちが差別なく幸せそうにしていたことが大変印象的であった。

この小学校では、このようにいつも身近にいる多様な宗教、言語を背景に持つクラスメートと日々会話することが、宗教から生まれる文化の違いについて、自然に理解することができるようになると校長先生がおっしゃっていたが、まさに、ここに多文化共生社会の理想の縮図があると思った。

その後、団員全員で、日本文化紹介として、「よさこい踊り」と「世界に一つだけの花」を披露し、引き続き、クラスに分かれて、少林寺拳法の実技や折り紙、けん玉、浴衣着付け体験などを一緒に子供たちと行い、子供たちが屈託のない笑顔で楽しんでくれたことが、楽しい思い出の一つとして残っている。

おわりに

今、報告書を書きながら、現地での全ての日程をこなし、全団員が元気に帰国し、ハードスケジュールにもかかわらず、帰国後研修も滞りなく終了することができたことを安堵をもって振り返っているところである。

両国では、団員たちは精力的に活動し、多文化共生の現場など様々な施設を訪問し、現地の人々と交流し、相互理解及び友好の促進に努めるとともに、両国の青年の高い英語力に最初は遠慮が

ちであった会話も、次第に、思ったことを積極的に質問したり答えたりして、文化的言語的背景も異なる人々と意見交換をしながら交流することの難しさや大切さを学んだと思う。そして、外から日本という国を客観的に見て、日本の良さや課題も知ることができ、さらには、自分自身についても深く見つめることにより何らかの成長に繋がられたのではないかと思う。私も、この一ヶ月余り、団員と寝食をともにして学びの旅を続けることができたことは、かけがえのない時間であったと感謝の気持ちでいっぱいである。

団員たちには、これから、このプログラムを通じて得られた知識・経験を糧として、自らの人生を切り拓いていって、日本のみならず、世界を舞台に活躍できる人に成長していってほしいと思う。そして、これから長い人生を歩んでいくうえで、団員たちに次のエールを贈りたい。

人生には後悔はつきものであるとよく言われるが、皆さんには、自分が本当にやりたいと思うことに果敢に挑戦し、心豊かで納得のできる充実した人生を歩んでいってほしいと思っている。まず、挑戦することを恐れず、もし万が一失敗しても、納得した上で次の人生の夢に向かって進んでいってほしいと思っている。

最後となるが、このプログラムの調整・実施にあたり、多大なご尽力をいただいた内閣府及び青少年国際交流推進センターの皆様並びに現地で大変お世話になったコーディネーターやホストファミリーの皆様、その他本プログラムに関わってくださったすべての皆様にも深く感謝を申し上げたい。

また、豊富な海外経験をお持ちの副団長の鈴木さんには、好奇心旺盛で個性豊かな団員のよき相談相手になり、また、きめ細やかな心配りでよく団を取りまとめ、さらには海外経験が少ない団長も支えていただいたことに対して、心から感謝を申し上げます。

多文化共生を目指して

「National Identity」の定義とは? 「多文化共生」とは何か? 理想の「多文化共生社会」とはどんな社会なのか?

これらの問いは、私が本研修中に常に直面していたものである。中高時代から異文化交流や国内外の様々な文化に関心を持ち、大学でも多文化の平和的共存を研究テーマとしている身として、形式的な答えを出すことはできる。また、研修中の各種施設への訪問や多くのディスカッションを通して、新たな知見を得ることもできた。他にも、日本で多様な文化的背景を持つ人々がどのような状況にあって、どんな改善策が必要なのか、ということもある程度理解しているつもりでいた。

しかし、本研修でその実現の難しさと、よりよい多文化共生社会を目指すには非常に長い時間がかかるということを感じた。また、日本と派遣国では「多文化共生」の実態が大きく異なるということも知った。以下、これらについて具体的に述べる。

まず初めに訪問したリトアニアでは、歴史に対する国民の強い意識が最も印象に残った。リトアニアの国名は1009年の文献に初めて現れるが、その後、勢力を拡大し、15世紀にはヨーロッパで最大の領土を持つ国となっていた。しかし、19世紀にはロシアに占領され、第二次世界大戦時にはドイツの占領下に、その後1990年に独立を回復するまで再びソ連に占領されるという、苦難の歴史を持つ。長い歴史を持ちながら、完全に独立した国家となったのは、たった30年前のことなのである。

したがって、多くの国民の中には特にロシアへの対抗意識が共有されており、占領されていた時代や建国の歴史を伝えるモニュメントなどが町中に残されていた。その具体例として印象的だったのはリトアニアの国会である。立派な建物の内部には占領に抵抗した市民の写真が掲げられており、議場入口には独立を回復した1990年3月11日という日付が刻まれていた。また、自分たちの手で議会を守ったことを誇りに思う様子が伝わってきた。他にも、独立後の1991年1月8日に起きた暴

動によってガラス窓に開けられた穴がそのまま展示されていることも印象的だった。当時議会が守られたことで今日のリトアニアの自由があることを伝えている。

また、リトアニア第3の都市であるクライペダ市内を散策した際に、ガイドの方が大きな門のモニュメントについて説明してくださった。一見すると日本の鳥居によく似ているが、右上が欠け、鳥居の右足の部分が違う色の石で造られていた。解説によると、欠けた部分はロシアによって奪われてしまったカーニングラードを表しているそうだ。また、違う色の石の部分はロシア占領下でリトアニア語の使用が禁じられた際に、秘密裏にリトアニア語の出版物を渡し、その言語を守った人々を象徴している。結果としてカーニングラードは返還されなかったが、リトアニア語を今日に至るまで守り抜くことに成功したのだ。この点からも、リトアニアの人々のナショナル・アイデンティティが強い理由をうかがい知ることができる。



クライペダ市内のモニュメント

こうした強い歴史認識が共有されているものの、リトアニアではほぼ無条件に、どんな出自の人も市民権を得ることができる。その例として首都のビリニウスには多くのロシア人やポーランド人が暮らしている。ただ、彼らは完全にリトアニアに馴染んでいるわけではなく、少し気まずい思いをすることもあった。そのため、文化交流センターで伺ったリトアニアに暮らす少数民族の人々のお話も心に残っている。決して多数ではないものの、リトアニアにはユダヤ人やタタール人など様々な少数民族のコミュニティがあり、センターはそれらコミュニティ同士やリトアニア人たちとの架け橋となるような役割を果たしているようだ。また、そのお話の中で「ジブシー」という言葉を使っていたことが気になり質問したところ、完全に禁句というわけではなく、彼ら自身が団体の名前として用いることもあるとのことだった。「ロマ」という呼び方は若い人々の間で一般的であり、その方が無難であると説明して下さった。しかしながら、ロマの人々は肌の色から完全に見分けがつかないため、あまり他の文化的背景が異なる集団とは関わらないようなコミュニティを形成しているようだ。また、一般的な仕事になかなか就けないために違法な仕事に就き、さらに印象が悪化してしまっているとも仰っていた。これまで映画や漫画の中でしか触れてこなかった少数民族の「ジブシー」の人々について、その実態を身をもって知ることができた。

センターの2階には集会に使える部屋があるのだが、その壁にタタール人の宗教施設、ロシア正教会、ユダヤ人の教会、古いモスクというようにそれぞれの宗教の祈りの場の絵が掛けられていた。どんな文化的コミュニティにも優劣をつけず、尊重する姿勢が感じられる空間だった。

他にも、リトアニアの UNESCO 国内委員会への訪問も多文化共生を考えるうえで非常に貴重な機会となった。国連における UNESCO の立ち位置や日本とのかわりについてお話して下さった後の質疑応答で、少数民族の人々への対応についても説明して下さった。具体的には、あるコミュニティの中で薬物の乱用が問題になっていた。そこで、法に適った生活をするよう人々を促したり、学校に通わせるために教員を派遣したりしているようだ。強力な解決策があるわけではなく、常に模索していると仰っていたが、UNESCO 憲章に則り、少数民族の人々を決して取り残さないという意識を感じた。

以上のように、リトアニアではアイデンティティ

と共生について多くを学ぶことができた。リトアニアの青年たちが非常に高い政治参加意識を持っていることの一つが、このアイデンティティの差ではないかと考えた。

オーストリアでは、これまで持っていた音楽の都という単純な固定観念を打ち破る学びを得た。もちろんそれも間違いではないが、自然が豊かで、多様な人々が暮らす国であった。例えば、決して高級住宅地ではない地区に位置する学校には本当に色々な肌の子どもたちが同じ教室で学んでいた。欧米では普通の光景かもしれないが、日本に暮らしていたらまず知らない世界であり、日本の多文化共生に向けた対策が遅れているのはそのためではないかと感じた。

オーストリアは他のヨーロッパ諸国と同様、2015年に難民の受け入れについて大きな転換点を迎えた国である。実際、私たちが滞在したホテルも難民の出自を持つ人々によって経営されていた。日本にいてそのことを強く実感することは少なかったため、訪問先の中でも「biber」という雑誌編集社が印象に残った。「biber」は移民またはイスラーム教徒向けにドイツ語の雑誌を編集している。資金がそれほど多いとは言えない中、有益な情報を届けようという職員の方々の意志が伝わってきた。

この訪問で印象に残った点は、ウィーンにあるケバブ屋さんについて教えて下さったことである。実はウィーン市内には、トルコや中東系の人々が多く暮らしている地区がある。たまたまその最寄り駅で地下鉄を降りると、大通りの両脇にいくつものケバブ屋さんが並び、歩いている人々もほぼオーストリア人ではないようだった。話を戻すと、あるケバブ屋さんが市内で開業したものの、欧米人の客は初めのうちは来なかったようだ。その後だんだんと評判が上がって欧米の人々も来るようになり、異文化が背景にあるウィーン市内の店のうち、最も早くクリスマスの装飾をした店となったようだ。多文化共生と言うと、少数民族の人々に対して何をしてあげられるか、といった上から目線となってしまうことが多い。そのため、「biber」編集者の一人が、来たからには順応すべきだと仰っていたことが非常に印象的だった。

オーストリアへの訪問を通して、移民や難民として来た人々がその社会に馴染むためには想像以上の時間がかかることを実感した。オーストリアは決して大きな国ではないため、難民の方々が押し寄せたときの衝撃や不安の大きさは想像に難くなかった。

2週間を超える派遣国での学びを通して、多文化共生が実現した社会は一朝一夕にできるものではないことを痛感した。また、平和を作っていくということも非常に長い視点でとらえることが必要だと知ることができた。やはり、訪問して人々と出会い、その国の空気に触れなければわからないことは多くある。政治参加や異文化との関わりなど、非常に多くを学んだ研修であった。

翻って、自分がこれからどう生活するか、また今後の研究をどのように進めていくのか、幅広いテーマのうち何に注目するか、といったことについても再考することができた。

また、令和2年にオリンピック開催を控える中で自分がどう政治に参加するかということも見つめ直した。リトアニアの青年たちに共有されていたように、「自分が社会を変えなかったら誰がやるのか」という当事者意識を強く持たなければならぬと感じた。

最後になるが、本研修で出会ったすべての方々に感

謝申しあげたい。団員の皆さんとは、事前研修や海外派遣中、日本での事後研修など約1か月を共にした。オーストリア・リトアニア派遣団には本当に様々な経験を持つ人々が集まっており、刺激を受けたり支えられたりしながら、充実した研修にすることができたのは皆さんのおかげである。日本全国から集まっているにもかかわらず、温かく深い関係を築けたことを有難く思う。また、海外青年たちとの出会いも私にとって非常に大きな財産となった。これまで知らなかった考え方を知り、ディスカッションでは意見を持つことの大切さを痛感したり、彼らの目を通して日本をとらえ直したりすることができた。こうした人との出会いを大切に、繋がりを保つことが日本と派遣国をつなぐ架け橋をさらに強くすることを信じ、これからも関わっていききたい。そして、本研修で得られた貴重な学びをさらに発展させ、将来の目標に向かって邁進していききたい。

新しい人生のきっかけ

私は今回の研修を通して、人生で初めてヨーロッパ地域を訪問し、オーストリア・リトアニア青年と深い交流をすることができた。特に印象に残った具体的な体験は二つある。

一つ目は、移民・難民の子ども達が多く通う小学校を訪問したことである。なぜなら、この小学校に通う子ども達の姿から理想的な多文化共生のあり方について学ぶことができたからだ。この小学校の校訓は、①Being Responsible Person ②Self-Determination ③Open to the Worldの三つである。二番目の校訓、Self-Determinationは民主主義構築のために必要な人間力である。そのため、先生達は子ども達に遊ぶ内容を強制せず自由に遊ぶ内容を決めさせたり、自分自身でベストな勉強方法を見つけさせるなど、子ども達が自分で意思決定をする機会を多く作り、その意思を尊重する。さらに、授業内では、答えのない問いについてのディスカッションを行う。例えば、「世界はなぜあるのか」「お化けとライオンはどちらが強いのか」といった問いである。答えのない問いのため、全員の意見が正解であると先生は強く主張していた。子ども達は、ディスカッションを通して、他者の意見を尊重する力を身につけることができ、また自分の意見を尊重されることによって、自分の意思を強く持てるようになる。「全員の意見が正しい」—そのような教育環境が子どもの自己肯定感を高めることに繋がると強く思った。また、この学校は移民・難民の子ども達が多いため、生徒間、生徒と教師間で言語や宗教が異なる。そのため、常に子ども達は差異に遭遇するが、日々の会話を通して差異を認め合えるようだ。小さい頃から差異が身近にあり、それを受け入れることのできる子ども達は、誰一人として取り残されない理想的な多分化共生社会を築き上げていくことのできる地球市民に育つと感じた。私は、理想的な多文化共生とは、一人一人の意見が尊重され、一人一人が差異を楽しみ、その差異を認め合うことのできる社会であると考えている。そのため、自分の意見を主張しながらも他者の意見を受け入れ、純粋に差異を楽しみ合い、共に良く生きる子ども達の姿から理想的な多文化共生のあり方について学ぶことができた。

二つ目は、オーストリアの首都であるウィーンを散策する中で、同性愛者が現れる信号機をいくつも目にしたことである。この信号機は「欧州国別対抗歌謡祭（ユーロビジョン）」の60周年を祝うために建てられたものであり、ウィーンの「minorityへの寛容さ」を示すものである。日常生活においてminorityについて考えさせる機会がオーストリアでは多かった。そのような環境であることから、オーストリアはminorityへの関心が高い国であり、一人一人の意見を尊重する国であると感じた。



オーストリアにある同性愛者が表示される信号機

次に、オーストリア・リトアニア青年とのディスカッションを通して、学んだこと二点について述べる。

一点目は、「自分を信じることの重要性」である。リトアニア青年とのディスカッションの際に、リトアニアの教育事情について学ぶことができた。リトアニアの学生も日本と同様に義務教育を終わらせなければならないが、日本と違い、一定年数で義務教育を卒業することに義務感を感じていない。リトアニアの学生は、中学入学前や高校入学前に、学校に通わずに自分の好きな道にどっぷり浸ることが多い。それに対し、日本人は、みんなと同じであることを望むため、高校卒業までは浪人

をしないことを望んでいると感じる。たとえ、浪人をしたとしても、その理由は、自分の好きなことを極めるためではなく、入学したい学校に合格するための受験勉強であることが多いと感じる。「学生時代に自分を信じ、自分の好きなことに思いっきり浸ることができる環境」-この環境がリトアニア青年の心を豊かにし、自分を信じることのできる高い自己肯定感に繋がるのではないかと印象を受けた。この経験から、「普通」に囚われすぎず、自分の興味のある分野に思いっきり挑戦する重要性を学んだ。

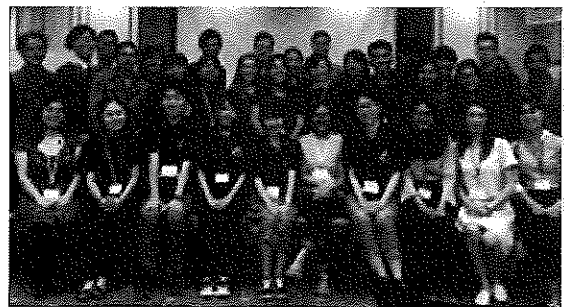
二点目は、「人生は自分の人生である」ということである。ヨーロッパはワークライフバランスが日本よりも整っている。例えば、オーストリアは、労働者のワークライフバランスを保つために、日曜日にお店を開いてはいけないという法律がある。また、国際会議でリトアニア青年は「仕事のために生きていない。生きるために仕事をしている」「日本は働いた時間に応じて給料が出るが、ヨーロッパは働いた結果に応じて給料が出る」と話していた。オーストリア・リトアニア青年は、仕事のために生きているわけではないため、仕事よりも、旅行や自分の趣味の時間を大切にする。資本主義の社会の中で、お金を稼ぐことは重要であるが、彼らとのディスカッションを通して「誰の人生なのか、何のための人生なのか」を考えるきっかけとなった。

さらに、オーストリアのホストファミリーとホストファミリーの親友からも、人生は自分の人生であるということ学んだ。彼女達は現在、NGOで働いている。日本と同様にNGOの給料は高くはないが、環境保護のために働きたいと強く話してくれた。仕事の給料の高さではなく、仕事に対する熱い想いが人の魅力を掻き立てるものであると強く実感した。オーストリア・リトアニア青年との交流を通して「自分の人生の舵を切るのは自分。そのためには努力をする必要がある」ということを彼らの姿から教えてもらった。

最後に、私が今回の研修を通して得た成果二点について述べる。一点目は「人間の可能性は無限大である」と実感したことである。この事業を通して、大学生ながら市議会議員をしているリトアニア青年や国際社会を舞台に活躍しているメキシコ青年など、実力と強い情熱を兼ね備えた多くの海外青年と友人になることができた。「社会を変えたい、自分の理想の社会を築き上げたい」-その強い熱意で彼らは勉学に励んでいた。現在の世界は数多くの問題があり、それらの問題を解決してもまた新しい問題が生まれ、地球課題に終わりはない。しかし、その大きな課題に立ち向かっている青年

が、人に寄り添うことのできる人格者が多くいること本事業を通して実感し、世界の希望を感じた。さらに、常に自分の夢に向かって努力している青年の姿から、自分の可能性を信じることができるようになった。

二点目は、英語で人の意見を聞き出す力である。私はグループディスカッションの際に、第一発言者がいない場面によく遭遇した。その際に積極的に自分が第一発言者となり、自分の意見を話し、また他者の意見を聞き出すことを意識した。その結果、国内外青年の能力が最大限に発揮されるよう、発言しやすい環境作りをすることができた。さらに、海外青年との食事の際には、積極的に面識のない海外青年に話しかけ、より多くの青年と打ち解けることを心がけた。上記のような心がけの結果、オーストリア・リトアニア青年だけでなく、メキシコ・ペルー・フィリピン・ベトナム青年とも仲良くなることができ、国境を越え、より多くの海外青年と一生涯の友情を築くことができた。



National Identity & Multicultural Society Teamの集合写真

私は、本事業を通して主に「理想的な多文化共生のあり方」と「自分自身を信じ、自分の人生を歩むこと」の二点を学び、英語によるコミュニケーション能力を高めることができた。国際会議では、理想的な多文化共生社会を築くためには、政治と教育の改革とメディアリテラシーが必要であると結論づけた。誰も他者の幸せを奪うことはできないし、世界はみんなのためにあるものであると思う。そのため、今後は本事業を通して出会った国内外の青年とともに、一人一人の幸せが実現され、笑顔あふれる多文化共生社会を作りあげること力を入れていきたい。

そこで、私はminorityの居場所を作り、minorityの意見を社会へ広める活動をしている。具体的には、韓国人被爆者の居場所を作り、彼らの意見を社会に反映させていくことである。現在、私は韓国人被爆者について理解を深めているが、韓国人被爆者は日本からも韓国からも忘れられたminorityとなっている。本事業終了後、韓国人被爆者に関する研究を経て、理想的な

多文化共生社会と核兵器のない世界のために、彼らの意見や想いを多くの人に伝えるシンポジウムを2019年12月に開催した。参加者からは「韓国人被爆者の存在について初めて知った。このシンポジウムのような市民の活動が理想的な多文化共生社会、そして日韓友好に繋がると思う」と多くの感想をいただいた。これからも、今回の研修を通して深めた多文化共生への熱い想いを胸に、日韓関係友好のために活動を続けていく。

また、今回の研修を通して私は自分の弱点を実感することができた。気付いた主な自分の弱点は、英語力とリーダーシップ力である。本事業参加青年はみな英語

が第一言語ではなかったが、特に海外青年は英語が完璧であった。また、National Identity & Multicultural Society Team全体でのディスカッションの際には、日本青年ではなく、海外青年がリーダーシップを発揮した。私は将来、国際社会を舞台に活躍できる人材に成長していきたいと強く思う。海外青年から学んだ「自分の人生を自分で描く」との強い想いで、本事業で気付いた自分の弱点を克服する挑戦をしていく。そして、自分の思い描く理想的な多文化共生社会を築くことのできる、実力のある青年に成長していくための挑戦を続けていく。



オーストリア・リトアニア派遣団の集合写真